

福祉系大学生の死生観及びその性差に関する調査

死生観尺度による検討

Study of University Student Attitudes toward Life and Death

片桐史恵*
Fumie KATAGIRI

抄録：本研究は、福祉系大学生の死生観及びその性差を明らかにすることを目的とし、死生学履修学生123名に対して平井ら(2000)が開発した死生観尺度を用いて調査した。その結果、特に第3因子の「解放としての死」で女子学生が男子学生に比べ有意に死により人生の重荷、世の苦しみや痛みなどから解放されると考えていることがわかった。第7因子の「寿命観」に関しては性差も関して有意な差は見られなかったが、女子学生は男子学生に比べ強く意識しているということが伺えた。また、第5因子の「人生における目的意識」については男子学生が女子学生比目的意識が強い傾向を示した。

キーワード：死生観、死生観尺度、大学生、性差、生と死

I はじめに

2012年8月28日、中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」を答申した。この答申において、「知識を基盤とした自立、協働、創造モデル」構想、「少子高齢化社会等の中で誰もが必要な医療・介護・保育を安心して受けられる社会システムの構築と維持、そのために必要な人材の育成」「人材の質の確保」の必要性が挙げられた。その一環として、生と死に真正面から取り組み高齢化社会に貢献できる人材を育成する教育は極めて重要であろうと考えられる。そのことは死生観に関する研究が盛んになってきたことから明らかである。

死生観に関する研究は、大野(1991)の「死への準備教育—特に大学生に対して—」、小西(1992)の「大学生の死生観・来世観」、怒田ら(1998)の「死生観と臓器移植に関する意識調査：本看護学生と一般学生、両親の比較」、興古田ら(1998)の「大学生の自殺意識と死生観に関する検討」、興古田ら(1999)の「大学生の自殺に関する意識と死生観に関する検討」、平井ら(1999)の「死生観に関する研究(I)—死生観尺度の開発—」、坂口ら(1999)の「死生観に関する研究(II)—死生観尺度の信頼性及び妥当性の検証—」、森川ら(1999)の「死生観に関する研究(III)—発達による死生観の変化—」上田(1998)の「看護師の『死観』と個人特性との関連—死の不安尺度及び死観尺度に焦点をあてて—」、小泉(2000)の「大学生の信仰する宗教と死生観の関連」、松浦(2000)の「我が国の大学生の人

口妊娠中絶に対する態度に関する研究—胎児観・死生観との関連—」、丸山ら(2000)の「告知に関する死生観の比較研究」、平井ら(2000)の「死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—」、井上(2001)の「切腹に見る日本人の死生観—潔い死を美化した武士道—」、吉田(2001)の「文科系大学生の死生観と最先端科学技術：死生観に関わる日常生活経験と科学技術の理解に関する調査から」、林(2001)の「思春期の死生観(その2—中学生と短期大学生のアンケート調査を通して—)」、岡ら(2002)の「死生観に関する教育の必要性についての一考察—女子大学生のアンケート調査から—」、島園(2004)の「死生観と生命倫理」、岡本ら(2005)の「看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析」、森本ら(2005)の「大学4年次における看護学生と一般女子学生の死生観に関する研究—死生観尺度・多次元自我同一性尺度による分析—」、糸島(2005)の「死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較—」、道廣ら(2005)の「死生観尺度の信頼性・妥当性の検討」、白杵ら(2006)の「働きながら看護学を学修している学生の死生観—死生観尺度における因子分析から—」、長崎ら(2006)の「年代および性別による死生観の違い—非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—」、石田ら(2007)の「看護学生の死生観に関する研究」、園田ら(2007)の「ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討」、植田(2010)の「壮年期女性の死生観尺度の作成」、竹内(2010)の「日本人の死生観」、山下ら(2010)の「学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較」、古市ら

*人間福祉学部 健康福祉学科

(2010)の「集中内観による死生観の変化の検討—臨老式死生観尺度を用いて—」、久原ら(2010)の「薬学生を対象とした緩和医療教育の検討(第2報)——知識尺度・死生観尺度による前後比較」、岡本ら(2011)の「大学教養課程における死生観教育のあり方検討」、岩下ら(2011)の「終末期ケアに対する看護学生の態度と影響する要因」、島園進(2012)の「近代日本の死生観言説と死生学：伝統的な死生観の継承と展開」、二木ら(2013)の「養護教諭養成課程における死生観を養う教育の検討」、杉浦ら(2013)の「臨老式死生観尺度を使用した実務実習を終えた薬学生の死生観に関する意識調査」などが挙げられる。このような死生観に関する研究において女性の死生観のみに注目した研究がみられる。このような研究は女性と男性の社会的位置付けの歴史的経過に見られる差異が死生観に反映しているかもしれないという前提で行われている可能性がある。したがって死生観の性差について無視することができないと考える。

死生観の性差について言及している研究としては、丹下(1995)、松田(2000)、田中(2001)ら、安藤(2004)ら、松下(2009)、日潟(2011)等の研究が挙げられる。丹下(1995)は、心的発達及び死に関する深い思索は肯定的な死生観と関連すること、そして死の回避に向かわない限りにおいては肯定的死生観と関連するということを実証する目的で研究を行った。その結果、性差に関して男子は死の思索頻度が生を全うさせる意志に影響しないが、女子では思索頻度が高いと生への意欲が低下している点、女子の方が男子よりも死後の存在を信じている点、女子の方が間接的であれ死との接触を回避したが点、また、女子は男子よりも死を現実的にとらえている点、女子の方が肉体のみの生よりは精神の死を重視している点を指摘した。また、女子は男子よりも死への恐怖や死からの回避の意識が高いことに関しては、死後の世界を信じることや運命として受け入れることによって、死に対する恐怖心を低減しようとする意識が働いていると考察している。松田(2000)は、対他の次元の死の不安は、女子の方が高いという性差は20代においてのみ認められる性差であることが判明したとし、他者との関係性の性差が、死の不安の対他の次元における性差につながる。すなわち、女子は男子に比べて重要な他者との関係確立により強く傾倒するゆえに、関係性が死によって消滅することにより不安を抱くのではないだろうかと考えている。田中(2001)らによれば、男子は女子よりも死に対してあまり関心を示さないとされ、死後の世界や寿命観を抱きにくいことも推測される。安藤(2004)らの死生観に対する性差の検討において、女子の方が男子よりも死への恐怖や死からの回避の意識が高いことが示されている。松下(2009)は、青年期の死の不安と死生観の視点で4つの仮説を設定し論述している。その中の仮説2が、『死生観には、性差狩り、女子は男子に比べて「死はこの世の痛みと苦し

みからの解放である(解放としての死)」、「死んでも魂は残る(死後の世界観)」、「寿命は最初から決まっている(寿命観)」と考える者が多い』である。正規性の検定を行ったところ正規分布ではなかった。そこで、U検定を実施したところ性差がみられたと報告している。日潟(2011)は、中年期に焦点を当て死に対する意識の関連について研究し、性差について、「死後の世界観」、「解放としての死」、「寿命観」には性別の主効果がみられ、これら3項目に対して女子が男子よりも有意に高い得点を示したと指摘し、女子は男子よりも死後の世界を信じ、死を開放としてとらえる意識や死ぬことを運命として受容する意識が高いと述べている。

このよう、「死生観」に関する研究は最近著しい進展がみられるが、福祉の現場や福祉従事者養成校及び福祉系学生へ対応した研究は少ない。また看取り加算が導入された2005年以降福祉の現場において人の最期と向き合う機会が急速に増加したために、このような現場にふさわしい人材を必要としている。そこで福祉の現場で必要とする人材育成を主目的とする福祉系大学生の死生観を明らかにすることに加え、性別による特徴もみることにした。

II 方法

1. 調査協力者 中部学院大学において後期に開講されている死生学の講義を受講し、本研究に協力することを承諾した学生123名(人間福祉学部84名、リハビリテーション学部27名、経営学部1名)を調査協力者とした。

2. 調査内容 調査は協力者の基本属性に関する調査と臨老式死生観尺度の2種類を実施した。

1) 協力者の基本属性について：基本属性に関しては年齢、性別、宗教、終末期ケアの経験の有無等21項目に回答を求めた。

2) 死生観の調査：死生観については、平井ら(1999)により考案された日本人の死生観を明らかにする質問紙形式の臨老式死生観尺度により調査した。本尺度は7因子から構成されている。第1因子は「死後の世界観」、第2因子は「死への恐怖・不安」、第3因子は「解放としての死」、第4因子は「死からの回避」、第5因子は「人生における目的意識」、第6因子は「死への関心」、第7因子は「寿命観」である。これら7因子には合計27質問項目が用意され、第1因子から第6因子まではそれぞれ4つの質問項目が、また第7因子は3つの質問項目が用意され、合計の質問項目数は27項目である。各項目ともに自記式で7件法により評価する。したがって、第1因子から第6因子までは各因子の最低点は4点、最高点は28点、また第7因子は最低点は3点、最高点は21点になる。本尺度は各因子ごとに得点を求めることとし、全因子の総合点を求めるものではない。な

お、本尺度は妥当性と信頼性の数的根拠を得ている。

3. 調査期間と調査手順 2013年9月24日4限目に開講された死生学の最初の講義時に2種類の調査を実施した。調査開始の前に学生らに研究の趣旨説明を行い、質問紙は無記名で個人が確定されないこと、学習成績に不利益を及ぼさないこと、調査協力は自由意志であること、得られた結果は研究目的のみとし、他の目的では使用しないことを伝え了承を得た。その後、調査用紙を学生に直接配布し、記入終了後、直ちに回収した。

4 倫理的配慮 学生の調査協力は調査用紙への記入し、用紙の回収をもって承諾したものと判断した。なお調査に関して大学の倫理委員会の了承を得た。

III 結果と考察

1. 福祉系学生の死生観の背景及びその性差

有効回答数は男子学生58名(52.4%)、女子学生53名(47.7%)、計111名であった。調査協力者の平均年齢は20歳で、男子学生の平均年齢は21歳、女子学生の平均年齢は19歳であった。調査協力者の家族及び同居の平均人数は4.4人で、男子学生の平均人数は4.2人、女子学生は4.7人であった。

「あなたの宗教はどれですか?—重複回答可—」の質問に対して、仏教と回答した学生は58名(51.3%)と最も多かった。性別にみると、男子学生が31名で、男子学生全体の53.4%、女子学生が27名で、女子学生全体の50.9%であった。続いて神道と回答した学生は6名(5.3%)であった。性別にみると、男子学生が5名(男子学生全体の8.6%)、女子学生が1名(女子学生全体の1.9%)であった。キリスト教との回答は2名(1.8%)で、いずれも男子学生であった。イスラム教と回答した学生は男子学生が1名で、その他の宗教は女子学生が2名であった。無宗教と回答した学生は38名(調査協力者の学生全体の33.6%)で、そのうち、男子が19名(32.8%)、女子が19名(35.8%)であった。この質問は、該当する宗教をすべてに回答させたが、複数の宗教と回答した学生は男子の3名(5.2%)で、学生全体の2.7%であった。複数と回答したものはすべて仏教と神道の組み合わせであった。

「あなたの日々の生活の中で、宗教は重要な部分を占めていますか?」という宗教観に関する質問に対して、「あまり重要でない」と回答した学生が最も多く54名(47.8%)、そのうち、男子学生が28名(48.3%)、女子学生が26名(49.1%)であった。続いて、「全く重要でない」と回答した学生が43名(38.1%)、そのうち、男子学生が21名(36.2%)、女子学生が22名(41.5%)、「やや重要である」と回答した学生は5名(4.4%)、そのうち、男子学生が3名(5.2%)、女子学生が2名

(3.8%)であった。「非常に重要である」と回答した学生は3名(2.7%)で、全て女子学生(5.7%)であった。

「あなたのご家族の終末期ケアを経験されたことがありますか?」の問いに対して、「ある」が17名(15.0%)、「ない」が93名(82.3%)であった。この内訳は、男子学生の8名(13.8%)が「ある」、50名(86.2%)が「ない」と答えた。女子学生の9名(17.0%)が「ある」、43名(81.1%)が「ない」と答えた。このように終末期ケアを経験していない学生の多いのは核家族化の広まりを示しているかもしれない。なお、この質問の文言に関しては、調査が初回の講義前に行われたために、「終末期」という言葉の意味が理解できなかった学生も含まれていた可能性もある。

「あなたのご自身の終末期ケアをどこで受けたいとお考えですか?」の質問に対して、「自宅」と回答した学生は60名(53.1%)、「病院」と回答した学生は34名(30.1%)、「施設」と回答した学生は8名(7.1%)、その他が3名(2.7%)であった。男子学生と女子学生の内訳は、男子学生で「自宅」と回答した学生は、28名で、男子学生全体の48.3%、女子学生は、32名で女子学生全体の60.4%であった。女子学生は男子学生に比べやや多かった。続いて「病院」と答えた男子学生は23名で男子学生全体の39.7%であった。女子学生は11名で女子学生全体の20.8%で、男子学生は女子学生に比べ「病院」を選ぶものが多かった。「施設」と回答した女子学生は5名で、女子学生全体の9.4%で、男子学生は3名で男子学生全体の5.2%であった。終末期ケアは学生の過半数の54%が「自宅」を希望し、病院と回答した34%であった。このことは80%が病院で亡くなっている日本の現状と著しい違いを示した。

「あなたは、もし家族が『不治の病』と宣告されたとしたら、最後まで積極的治療を望みますか?」という問いに対しては、「かなり望む」と回答した学生が31名(27.4%)、「やや望む」が32名(28.3%)、「あまり望まない」が11名(9.7%)、「全く望まない」が11名(9.7%)、「わからない」が24名(21.2%)であった。「かなり望む」と「やや望む」を合計すると63名(55.7%)となり、半数以上の学生は、不治の病の家族に対しては積極的治療を望むと回答していることになる。この問いに対して、男子学生の16名(27.6%)と女子学生は15名(28.3%)が「かなり望む」と回答している。「やや望む」と回答した男子学生は16名(27.6%)で、女子学生は16名(30.2%)であった。それに対し「あまり望まない」と回答した男子学生は5名(8.6%)、女子学生は6名(11.3%)、「全く望まない」と回答した男子学生は7名(12.1%)、女子学生は4名(7.5%)であった。「分からない」と回答した男子学生は、13名(22.4%)、女子学生は11名(20.8%)であった。全体として男子学生と女子学生との間に顕著な違いはみられなかった。次に家族を学生自身に置き換えて質問した。

「あなたは、もしご自身が『不治の病』と宣告されたら、最後まで積極的治療を望みますか?」という問いに対しては、「かなり望む」が8名(7.1%)と「やや望む」が25名(22.1%)で、これら二つの回答の合計は33名(29.2%)であった。「あまり望まない」が24名(21.2%)、「全く望まない」が19名(16.81%)で、これら二つの回答の合計は43名(38.1%)であった。「わからない」と答えた学生は24名(21.2%)であった。自分が不治の病であった場合、最後まで積極的治療を望まない学生が多かったが、家族の場合、積極的治療を望む学生が多かった。このように「不治の病」の治療に対する態度は家族に対するものと、自分自身の場合では明らかに差異が見られた。不治の病の場合、自分自身に対しては積極的治療に消極的であるという結果が出た。この問いに対する男子学生と女子学生の内訳は、「かなり望む」と「やや望む」と答えた男子学生は24名(41.4%)、女子学生は19名(35.4%)であった。「あまり望まない」と「全く望まない」と回答した男子学生は21名(36.2%)、女子学生は22名(41.5%)であった。「分からない」との回答は、男子学生が13名(22.4%)、女子学生が11名(20.8%)であった。このように男女間の差は殆ど見られなかった。

「利用者の治療方針に関して本人の生前の希望と家族の希望が異なる場合に、どのような対応をしたいとお考えですか?」という問いには、「本人の意思を優先」が98名(86.7%)、「家族の意思を優先」が10名(8.8%)、「専門家の意見を優先」は0名、「その他」が1名(0.9%)であった。この問いに関しては、「本人の意思を優先」と回答した男子学生が50名(86.2%)、女子学生は48名(90.6%)であった。しかし本人でなく「家族の意思を優先」と回答した男子学生が7名(12.1%)、女子学生が3名(5.7%)もいた。

「あなたは、ご家族の最後を看取ってくれる人としてどのような人を希望するか(1番目の希望、2番目の希望)?」は、1番目の希望として、「家族」が98名(86.7%)、「親しい人や友人」が7名(6.2%)、「医療関係者(医師、看護師)」が4名(3.6%)であった。多くの学生は、家族の看取りは家族で行いたいと希望していた。2番目としては、「家族」が6名(5.3%)、「親しい人や友人」が38名(33.6%)、「医療関係者(医師、看護師)」が5名(4.4%)、「日々世話をしてくれる介護士、ヘルパー等」が2名(1.8%)で、この2名は女子学生の回答であった。1番目の希望としては、男子学生の49名(84.5%)と女子学生の49名(92.5%)が「家族」を挙げた。「親しい人や友人」を希望した男子学生は6名(10.3%)、女子学生は1名(1.9%)、「医療関係者(医師、看護師)」を希望した男子学生は2名(3.4%)、女子学生は2名(3.8%)であった。2番目の希望としては、男子学生の4名(5.9%)女子学生の2名(3.8%)が「家族」と回答した。「親しい人や友人」と回答

した男子学生は15名(25.9%)、女子学生は23名(43.4%)、「医療関係者(医師、看護師)」と回答したのは男子学生の2名(3.4%)、女子学生は3名(5.7%)、「日々世話をしてくれる介護士、ヘルパー等」との回答は、女子学生の2名(3.8%)であった。このように男女間の違いは殆ど認められなかった。

「あなたは、どこで、ご家族の葬儀をおこなう事を望みますか?」の問いに対し、「自宅」を望むとした回答が32名(28.3%)、「葬儀場、宗教施設」7名(62.8%)、「その他」が1名(0.9%)、「どこでもよい」が4名(3.5%)、「葬儀は不要」が1名(0.9%)であった。

家族の葬儀は葬儀場や宗教施設で行うことを望む学生が多数であった。以前は家族の葬儀を近所の手伝いを借りながら家で行ってきたのが日本の伝統であったが、家族構成の変容や葬儀社や葬儀場が身近に多くある今日、学生らにとっても葬儀場における葬儀に抵抗はないように思えた。この問いに対しては、以下にみるように男女差はみられなかった。すなわち「自宅」と回答した男子学生は18名(31.0%)、女子学生が14名(26.4%)、「葬儀場、宗教施設」と回答した男子学生は35名(60.3%)、女子学生は36名(67.9%)、「どこでもよい」と回答した男子学生は2名(3.4%)、女子学生は2名(3.8%)、「葬儀は不要」と回答したのは男子学生の1名(1.7%)に過ぎなかった。

2. 福祉系学生の死生観及びその性差

臨老式死生観尺度を実施した結果から因子ごとの成績を表1に示した。以下、この表に示された結果について、因子別に述べる。なお括弧内は因子名を表した。

(1) 第1因子(死後の世界観) 第1因子の死後の世界観には、「死後の世界がある」、「世の中には霊やたたりがある」、「死んでも魂は残る」、「人は、死後生まれ変わると思う」の各項目から構成されている。これら各項目について7件法で信じる程度を記入させた。最も信じる場合に7点、全く信じない場合を1点とした。以下の各因子についても同じ方法記入させた。この因子の平均得点は、男子学生が19.86、女子学生が19.62でほぼ同じ得点であった。したがって性差は全く認められなかったといえる。

(2) 第2因子(死への恐怖・不安) 第2因子の死への恐怖・不安には、「死ぬことがこわい」、「自分が死ぬ」、「死は恐ろしい」、「死は非常に怖い」の4項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生が17.76、女子学生が18.01でほぼ同じ得点であった。

(3) 第3因子(解放としての死) 第3因子の死としての解放には、「私は死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」、「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」、「死は痛み苦しみからの解放である」、「死は魂の解放をもたらしてくれる」の4項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生

表 1 死生観尺度因子別男子及び女子学生の平均得点

因子番号と因子名	男子学生(58名)	女子学生(53名)	t 値
1. 死後の世界観	19.86(6.58)	19.62(5.51)	0.2055
2. 死への恐怖・不安	17.76(7.89)	18.01(5.99)	0.1873
3. 開放としての死	13.33(6.42)	16.57(5.04)	2.9435*
4. 死からの回避	14.57(6.26)	14.17(5.93)	0.0649
5. 人生における目的意識	16.66(6.61)	14.17(5.28)	1.1277
6. 死への関心	16.17(5.97)	16.45(5.43)	0.2553
7. 寿命観	12.05(5.46)	14.17(5.43)	1.9434

()の数字は標準偏差値 *は $p < .05$

が13.33、女子学生が16.57で、女子学生の方が男子学生より得点が有意に高かった。このことから男女間に著しい違いがあるといえる。男子学生は女子学生に比べ保守的傾向であることがうかがえる。女子学生は男子学生に比べ合理的で、柔軟な特性を持つかもしれない。

(4) 第4因子(死からの回避) 第4因子の死からの回避には、「私は死について考える事を避けている」、「どんなことをしても死を考えることを避けている」、「私は死についての考えが浮かんでくると、いつもそれをねのけようとする」、「死は恐ろしいのであまり考えないようにしている」の各項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生が14.57、女子学生が14.17でほぼ同じ得点であった。したがって性差は認められなかった。

(5) 第5因子(人生における目的意識) この因子には、「私は人生にははっきりとした使命感と目的を見出している」、「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」、「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている」、「未来は明るい」の各項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生が16.66、女子学生が14.17で、男女間に差が認められたが、有意な結果とは言えなかったが、男子学生は女子学生に比べ人生を目的的にとらえる傾向があるといえるかもしれない。

(6) 第6因子(死への関心) 第6因子には、「『死とはなんだろう』とよく考える」、「自分の死について考えることがよくある」、「身近な人の死をよく考える」、「家族や友人と死についてよく話す」の各項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生が16.17、女子学生が16.45でほぼ同じ得点であった。したがって性差は認められなかった。

(7) 第7因子(寿命観) 第7因子は「人の寿命はあらかじめ『決められている』と思う」、「寿命は最初から決まっていると思う」、「人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている」の各項目から構成されている。この因子の平均得点は、男子学生12.05、女子学生14.17で女子の方が男子よりも得点が高かったが、有意な結果ではなかった。

死生観尺度における性差の検討の結果、女子学生の方が男子学生より、死とはこの世の苦しみ、人生の重荷、痛み苦しみからの解放であり、死は魂の解放をもたらしてくれると考えていることが示された。加えて、人の寿命はあらかじめ『決められている』と思い、寿命は最初から決まっており、人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められていると思うという結果からみると、女子学生は男子学生より死にポジティブに捉えていると言えるのではないかと。死に解放というプラスの意味合いを持たせ、ポジティブに考えることで死を恐れることなく、前向きに生き様とする死への態度の表明であると考えられる。上記の考察は、寿命観に対して、女子学生が人の寿命はあらかじめ『決められている』と思い、寿命は最初から決まっており、人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められていると思う傾向がある事にも通じる。つまり、寿命、運命であるといえることで、有限である命の期間に対し、抗うことなく受け入れる、言い換えれば受容しようとしており死を忌み嫌うものではなく、死までの生を与えられたもの、与えられた期間として捉えポジティブにプラスに考えようとする傾向があると考えられる。

IV おわりに

この福祉系大学生の死生観に関する調査、死生観尺度による性差の検討の結果、女子学生が男子学生より死を、解放として捉え、寿命観に関しても寿命や運命という存在を信じる傾向があった。どちらの結果も死という存在を受け入れる(存在の受容)態度を示していると解釈出来るのではないかと。

今回の調査は、福祉系大学生の死生観の調査として、死生学の講義受講者を対象に、特に性差に焦点を当てて検討した。今後は死生学の講義終了後、本報告と同様な手続きで実施した結果を報告する予定である。また学年進行に伴う死生観の変化や専門領域との関連も検討する必要がある。

文 献

- 安部幸志・坂口幸弘・平井啓・柏木哲夫・森川優子 (1999) 死生観に関する研究 (IV) - 告知との関連性について. 死の臨床, 22(2), 247.
- 安藤清志・松井豊・福岡欣治 (2004) 近親者との死別による心理的反応 - 予備的検討. 東洋大学社会学部紀要, 41, 63-83.
- 古市厚志・長島正博・長島美稚子・角田雅彦・鈴木美智雄 (2010) 集中内観による死生観の変化の検討 - 臨老式死生観尺度を用いて -. 臨床精神医学, 39(10), 1355-1361.
- 林昭志 (2001) 思春期の死生観(その2) - 中学生と短期大学生のアンケート調査を通して -. 児童文化研究所所報, 23, 1-17.
- 日潟淳子 (2011) 中年期の時間的展望と死に対する意識の関連 - 時間的態度による年代別の検討, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(2), 123-128
- 平井啓・柏木哲夫・坂口幸弘・安部幸志・森川優子 (1999) 死生観に関する研究 (I) - 死生観尺度の開発 -. 死の臨床, 22(2), 245.
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫(2000) 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床, 23(1), 71-76.
- 井上茂信 (2001) 東アジア時代と日本の使命 (155) 日本のナショナル・アイデンティティーを探る (10) 切腹に見る日本人の死生観. 世界思想, 27(4), 44-47.
- 石田順子・石田和子・神田清子 (2007) 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要, 18, 109-115.
- 糸島陽子 (2005) 死生観形成に関する調査 - 看護学生と大学生の比較 -. 京都市立看護短期大学紀要, 30, 141-147
- 岩下葉月・吉岡さおり (2011) 終末期ケアに対する看護学生の態度と影響する要因. 広島国際大学看護学ジャーナル, 9(1), 35-44.
- 金児曉嗣(1994)大学生とその両親の死の不安と死観, 人文研究 46(10), 537-564.
- 小泉晋一 (2000) 大学生の信仰する宗教と死生観の関連. 日本性格心理学会大会発表論集, (9), 64-65.
- 小西吉呂 (1992) 大学生の死生観・来世観. 沖縄大学紀要, (9), 130-148.
- 久原幸・野呂瀬彦・渡辺泰裕 (2010) 薬学生を対象とした緩和医療教育の検討 (第2報) - 緩和知識尺度・死生観尺度による前後比較. 日本医療薬学会年会講演要旨集, 20, 386.
- 丸山マサ美・安藤満代・松尾智子 (2000) 告知に関する死生観の比較研究. 生命倫理, 10(1), 100-110.
- 松田信樹 (2000)死の不安の年齢差に関する研究. 大阪大学教育学年報 5, 71-83.
- 松下千夏 (2009) 青年期の死の不安と死生観 - 高齢者との比較から -. 龍谷大学大学院文学研究科紀要, 31, 103-123.
- 松浦賢長(2000)我が国の大学生の人口妊娠中絶に対する態度に関する研究 - 胎児観・死生観との関連 -. 母子衛生, 41(2), 271-277.
- 道廣睦子・土井さや子・中桐佐智子 (2005) 死生観尺度の信頼性・妥当性の検討. 吉備国際大学保健科学部 (10), 11-17.
- 森本明子・宮松直美 (2005) 大学4年次における看護学生と一般女子学生の死生観に関する研究 - 死生観尺度・多次元自我同一性尺度による分析 -. 日本看護学会論文集 2 成人看護, 36, 297-299.
- 森川優子・平井啓・柏木哲夫・坂口幸弘・安部幸志 (1999) 死生観に関する研究 (III) - 発達による死生観の変化. 死の臨床, 22(2), 246.
- 長崎雅子・松岡文子・山下一也 (2006) 年代および性別による死生観の違い - 非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して -. 島根県立看護短期大学紀要, 12, 9-17.
- 二木はま子・三浦弥生ら (2012) 養護教諭養成課程における死生観を養う教育の検討. 飯田女子短期大学紀要, 29, 59-73.
- 怒田敏江・伊藤由紀枝・高橋美子・伊達萬 (1998) 死生観と臓器移植に関する意識調査 - 本看護学生と一般学生, 両親の比較 -. 日本看護学教育学会誌, 8(9), 163.
- 岡本明美・眞嶋朋子・増島麻里子・渡邊美和・浅井潤子・糸川紅子, 岩爪美穂, 熊野真紀, 重田宏恵, 田中史子 (2011) 大学教養課程における死生観教育のあり方検討, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, (33), 1-9.
- 岡本双美子・石井京子 (2005) 看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析. 日本看護研究学会雑誌, 28(4), 53-60.
- 岡須美恵・道廣睦子・安東勝弘・安福真弓 (2002) 死生観に関する教育の必要性についての一考察～女子大学生のアンケート調査から～. インターナショナル nursing care research. 1(2), 85-89.
- 興古田孝夫・赤嶺鈴佳・赤坂真史・名嘉幸一・石津宏 (1998) IE-25 大学生の自殺意識と死生観に関する検討 (リエゾンII). 心身医学, 38(suplement II), 76.
- 興古田孝夫・石津宏・赤坂真史・名嘉幸一・高倉実・宇座美代子・長濱直樹・勝綾子(1999)大学生の自殺に関する意識と死生観との関連についての検討. 民族衛生, 65(2), 81-91.
- 大町公 (1991) 死への準備教育—特に大学生に対して—, 奈良大学紀要, (20), 13-21.
- 大山由紀子・沖野良枝 (2002) 看護職の年代, 体験及び告知への意識と死生観の傾向 - 平井啓らの死生観尺度による調査結果の分析 -. 日本看護研究学会雑誌, 25

- (3), 257, 2002-07-08
- 坂口幸弘・安部幸志・平井啓・柏木哲夫・森川優子 (1999) 死生観に関する研究(Ⅱ) - 死生観尺度の信頼性及び妥当性の検証. 死の臨床, 22(2), 246.
- 島園進 (2004) 死生観と生命倫理 - その交錯の可能性 -. 宗教倫理学会第4回学術大会特集号, Separate Volume 3, 3-15.
- 島園進 (2012) 近代日本の死生観言説と死生学: 伝統的な死生観の継承と展開. 神学研究, 59, 127-141
- 園田麻利子・上原充世 (2007) ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 11, 21-35.
- 杉浦宗敏・黒田誠一郎・海津未希子・中嶋須磨子・岩瀬哲・中島由紀・内野克喜・鈴木洋史 (2013) 臨老式死生観尺度を使用した実務実習を終えた薬学生の死生観に関する意識調査. Palliative Care Research, 8 (2), 319-325.
- 竹内整一 (2010) 日本人の死生観について. 日台国際研究会議「東アジアの死生学へⅡ」, 2009-10-3, 台湾国立政治大学, 台北第一部研究発表死生学研究, 13(S1), 16-29.
- 田中愛子・後藤政幸・岩本晋・李恵英・杉洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 (2001) 青年期及び壮年期の「死に関する意識」の比較研究. 山口医学, 50, 697-704.
- 丹下智香子 (1995) 死生観の展開. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 42, 149-156.
- 富松梨花子・稲谷ふみ枝 (2012) 死生観の世代間研究. 久留米大学心理学研究 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要(11), 45-5.
- 植田喜久子 (2010) 壮年期女子の死生観尺度の作成. 高知女子大学看護学会誌, 35(1), 1-8.
- 上田稚代子 (1998) 看護婦の「死観」と個人特性との関連死の不安尺度及び死観尺度に焦点をあてて. 月刊ナーシング, 18(12), 74-80.
- 臼杵百合子・松村恵子 (2006) 働きながら看護学を学修している学生の死生観 - 死生観尺度における因子構造からの分析. 日本看護学会論文集, 看護総合, 37, 107-109.
- 山下恵子・赤沢昌子 (2010) 学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較. 松本短期大学紀要, (19), 73-80.
- 吉田浩子 (2001) 文科系大学生の死生観と最先端科学技術 - 死生観に関わる日常生活経験と科学技術の理解に関する調査から -. 生命倫理, 11(1), 26-31.

委員会受理日 2014.3.13

Study of University Student Attitudes toward Life and Death

Fumie KATAGIRI

Abstract : This research aims to identify the views of university social welfare students, especially their views on life and death as well as gender differences. This research applied the life and death measure developed by Hirai et al. (2000) to 123 university students who enrolled in the subject of life and death. The results of this research found that regarding a third factor of the study, "death as liberation," significantly more female students think death would remove the burden of life, suffering, and pain than their male counterparts. As for a seventh factor of the study, "views about lifespan," there was no significant gender difference, but it was observed that female students are more aware than their male counterparts. On a fifth factor, "purpose in life," male students showed a stronger awareness than their female counterparts.

Keywords : Views on life and Death, Life and Death measure, University students, Gender differences, thanatology.